

県営圃場整備事業（伊那市新山地区）

奈良尾・宮の原遺跡緊急発掘調査報告書

伊那市教育委員会
上伊那地方事務所

序

新山地区は伊那市内では最東端に位置する。古くは福智郷の一角、中世に至っては中沢郷の一角にそれぞれ含まれたところといわれ、古代・中世を通して重要な場所の一つと考えられ、研究者の注目の的でありました。この地区の考古学的調査は過去、数ヶ所実施したに過ぎません。この度、土地改良事業が実施されることになり、文化財保護の立場から記録保存を主目的とする緊急発掘調査が八月下旬・九月上旬にかけて行われました。調査期間中地元のみならず御協力を頂きまして無事終了することができました。この調査の結果については本文で述べてありますように縄文時代、平安時代の堅穴住居址一軒づつが発見され、新山谷の変遷がある程度解明できる手助けになったことと思われまます。

この調査結果が今後同地区の歴史解明の一端となり、文化財の重要性を十分に御理解いただければ、幸甚に存じます。

最後に、調査にあたりまして多大な御理解と御協力をいただき、全面的に御援助下さいました関係諸機関及び地元の方々には厚く御礼申し上げます。

昭和六十三年三月

伊那市教育委員会

教育長 宮下 安人

凡例

一、今回の発掘調査は県営圃場整備事業に伴なう、土地改良事業で第三次緊急発掘調査にもづく報告書とする。

二、この調査は県営圃場整備事業に伴なう緊急発掘で、事業は長野県上伊那地方事務所長の委託を伊那市教育委員会が受託し、さらにそれを発掘調査団に委託した。

三、本調査は、昭和六十二年度中に業務を終了する義務があるため報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることとした。

四、本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

○図版作成者

○遺構及び地形

小木曾 清 飯塚 政美

○土器及び石器実測図

小木曾 清 飯塚 政美

○写真撮影

○発掘及び遺構・遺物 友野良一 小木曾 清 飯塚政美

五、本報告書の欄外は主として、発掘調査団があつた。

六、遺物及び図版類は伊那市考古資料館に保管してある。

七、事務局は伊那市教育委員会社会教育課に置いた。

一 発掘調査の経緯

新山地区の土地改良事業は昭和五十八年度に新山農協から上方、四方部落にかけて実施致しました。この事業に伴って芝王遺跡の緊急発掘調査を同年七月―十月にかけて実施致し、多くの成果を得て、「芝王遺跡緊急発掘調査報告書」にまとめてあります。昭和六十二年度事業地区内は下新山奈良尾地籍、上新山宮の原地籍であり、この中には奈良尾・宮の原遺跡が含まれており、前者の遺跡は益前に、後者のそれは益過ぎから初秋にかけて実施致しました。

昭和六十二年七月一日 上伊那地方事務所長と伊那市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、さらに伊那市長と発掘調査団長友野良一との間で、昭和六十二年七月十五日に「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結する。契約後、発掘調査団を中心にして発掘準備にとりかかった。

二 調査の組織

奈良尾・宮の原遺跡発掘調査団

団長 友野 良一 日本考古学協会会員
副団長 御子柴泰正 長野県考古学会会員
調査員 飯塚 政美 日本考古学協会会員

・ 小木曾 清 宮田村考古学友の会会長

〔作業員名簿〕 柴佐一郎 里橋程三 酒井とし子 大久保富美子 上島正延 池上大二 建石紀美子 永井貞子 瀧田やすよ 田中 裕 下平博行 伊藤 勝 伊藤菊次 蟹沢清江 北原一喜 池上出光 井上 昌 竹松直人（敬称略順不同）

三 位 置

奈良尾遺跡は長野県伊那市富県北新区奈良尾部落の南西端に、宮の原遺跡は伊那市富県上新山区宮の原部落の東端にそれぞれ位置しています。奈良尾遺跡に至る最短距離の経路は次の通りである。JR飯田線伊那市駅を下車して北へ五百m位国道一五三号線を行くと入舟町という繁華街がある。この繁華街を右折して天竜川にかかる大橋を渡り、杖突街道を高遠の方へ向って約五mで美輪上原の信号機を設けてある交差点に至る。この交差点を右折して一m程南東へ行くと三峰川に達し、三峰川橋を渡り、五百m程で三叉路に着く。この一帯を押出と呼称している。名が示す通り、地形の最末端であり、後背の台地がいまにも押し出しそうな様相を呈している。この位置で遺路を右手にとって、三百m位南へ行くと、三叉路があり、この位置で左折して東へ入っていくと、約二mで今泉集落がある。この集落を通過して、さらに東へ一m位進むと、JR奈良尾バス停留所の案内板が右手に見え、ここを右折して南の山裾に入っていくと、すぐに右手に真宗寺庫裡の茅葺屋根がみえる。真宗寺の東側一帯が奈良尾遺跡で、現在は水田となっている。

宮の原遺跡に至る最短距離の経路は次の通りである。前述した押出の三叉路までの道順は奈良尾遺跡に至るまでと同様である。押出の三叉路を左手にとり、右手の眼下に新山川を見て、川沿いに東へ二m程行くと、いわば新山地区では最も中心地である集落が見えてくる。この中心地には新山小学校・富県農協新山事業所・新山保育園・新山老人憩の家等の公共の建物が密集して建っている。この地

点をさらに東へ進むと、伊那カントリークラブの案内標示板が左手に見え、この位置で段丘崖面につくられた道路を登り、左手の上の段に出る。上段の道をさらに一ヵ位東へ進むと明神社の林が見え、この神社周辺が宮の原遺跡である。現在は畑や水田に利用されている。

四 地形・地質

竜東地域の極一般的な地形は赤石山脈(南アルプス)の前山である伊那山脈が南北に連なっている。新山地区は伊那山脈より連なる小さな峰々にて周囲が取り囲まれ、さらに、小さな峰々より流出する小河川によって小さな谷状地形を形成し、台地の突端部に小単位集落が営まれており、いわば山村集落の典型的な形態を成している。

伊那山脈を構成する地質は諏訪湖の南端の平坦な山地を構成する塩嶺累層、守屋山周辺の第三紀層、領家変成岩類、鹿埜片麻岩帯等々に大別できる。竜東地域の地形・地質は大きく言って三峰川の成因あるいは変動によって左右されたと付いても言い過ぎではないと思われる。三峰川は後背山地を流域とする水系の小河川の水が集まっているので、豪雨、豪雪、梅雨時等の時に流量が増大し、洪水の危険性を多く含んでいる。

奈良尾・宮の原遺跡は新山川による影響は極めて大きいと考えられているので新山川について触れてみることにする。新山川は伊那山地新山時にその源があり、途中、小松川や幾多の流れをまとめ北へ流れ、押出付近で三峰川に注ぎ込み、三峰川の主要な支流で

ある。こう配も急で、直流し、季節的に流量及び流質の変動が顕著であり、流路距離がみじかい。従って水害を起しやすいた状態である。奈良尾遺跡の北側に新山川が、西側に小河川が流れていた。南から北の傾斜地のために押し出しが厚く、何層にもわたる砂層や砂礫層の反復であった。宮の原遺跡は南側に新山川が、北側に小松川が流れている間の台地上に存在し、東から西への傾斜である為に、東山麓からの押し出しが強く、砂礫層の堆積が厚く覆っていた。

五 周辺遺跡の歴史的環境

第1回富県地区遺跡分布図で掲載したように、現在、新山地区で確認された遺跡は10ヶ所を数える。これらの遺跡名と、各々の遺跡で検出された遺構・遺物を記してみると次のようになる。北林遺跡は縄文中期。今泉遺跡は縄文式・勝坂式の土器片、打製石斧、磨製石斧。舟ヶ洞遺跡は縄文早・前・中期土器片。中平遺跡は加曾利E式土器片。宮原遺跡は勝坂式、加曾利E式、加曾利B式の各土器片。打製石斧、石錘、大型石匙等の石器。合の原遺跡は縄文中期堅穴住居址一軒、勝坂式、磨製石斧、敲石、凹石、石皿、木炭。小松遺跡は加曾利E式、打製石斧、和手遺跡は打製石斧。今回、発掘調査を実施した奈良尾・宮の原遺跡は後述する。昭和五十八年、土地改良事業実施に伴って芝王遺跡の発掘調査を実施した。その成果について記す。「奈良・平安時代の堅穴住居址十六軒、中世堅穴十基、中世柱穴群」。新山から一山越えれば中沢に至る。このような地理条件からみて、中世には中沢氏の支配した中沢郷の北部地域に属していたと思われ、それを実証するのが四方の地蔵菩薩坐像であ

る。この地蔵菩薩坐像については「伊那市の文化財」で次のように記している。「伊那市有形文化財彫刻に昭和五十二年十月二十九日に指定。像高六十三cmの樟材寄木造りで彫眼、布下地漆箔、白漆は欠失している。口頂で衲衣に袷袢を着け、その端は左肩を覆い、左手は掌上に宝珠を捧げ、右手は五指を捻じて錫杖を執る。頭部は一本で、体型は前後を肩で廻り付け、肘先は袖先で手首を廻り付け、膝前は横に廻り付け、裳先もまた廻り付けている。右手の第二指は後に補っており、第五指の先を欠失しているが、全体によく保存されている。相好豊かで眼は半眼に、唇はよく引締って安静な面貌を示し、肩の張りが大きく、肉どりが豊満で、かつ、よく締り、三道も美しく整調されている。衣文のたたみが複雑であるが深く抉り、稜高く残した彫法は見事で、銘はないが、鎌倉



第1図 富県地区遺跡分布図

遺跡の名称

- | | | | |
|---------|-------------|---------|---------|
| ① 北林 | ② 今泉 | ③ 奈良尾 | ④ 芝王 |
| ⑤ 舟ヶ洞 | ⑥ 中平 | ⑦ 宮の原 | ⑧ 合の原 |
| ⑨ 小松 | ⑩ 和手 | ⑪ 大塚古墳 | ⑫ 上垣外 |
| ⑬ 宮の花 | ⑭ まこもが池 | ⑮ 御殿場 | ⑯ 葛蒲平古墳 |
| ⑰ テマテ古墳 | ⑱ テマテドウセギ古墳 | ⑲ 根木谷古墳 | ⑳ 根木谷中墳 |
| ㉑ 手間手 | ㉒ 不半路 | ㉓ 八人塚 | ㉔ 小御堂 |
| ㉕ 阿原古墳 | ㉖ 高岱 | ㉗ 妻玉古墳 | ㉘ 羽根原 |
| ㉙ 羽根田 | ㉚ 駒合古墳 | ㉛ 三ツ木 | ㉜ 駒ヶ原 |

時代末か、南北朝時代の趣をよく伝えている。
奈良尾遺跡の西端に真常寺があり、この寺の由緒は「伊那市寺院誌」によれば次のように記されている。「真常寺は龍勝寺の末寺で

奈良尾遺跡

一 発掘日誌

昭和六十二年八月一日(土) 晴 テント及び発掘器材を段島城跡より運搬して真常寺に面した東側の最も高い位置にテントを南北に長く二張り建てる。

昭和六十二年八月三日(月) 晴 休耕田の草刈りを実施する。

ところどころにグリット掘り状にグリットを入れてみる。若干、近世陶磁器片の出土をみた。水田は割合に湿気が多く、耕土層と地場層を取り除くと下に木の枝を利用した暗渠排水跡が見られた。

昭和六十二年八月七日(金) 晴 グリット掘りを、北側、北側へと進めて行く。下段の水田へグリット掘りを入れて行く。遺構の検出は何もない。若干、近世陶磁器片出土。

昭和六十二年八月十日(月) 晴 グリット掘りを最下段の水田で実施する。遺構の検出は何もない。遺物は一つ出土しなかった。

昭和六十二年八月十三日(金) 晴 本日はお盆であるが、仕事の日程上、作業を実施する。全測図の作成、グリットのセクション図完成。本日をもって奈良尾遺跡の調査終了。

天文の頃開かれたと伝えられており、龍勝寺の過去帳にも「龍勝寺九世天智玄契が同寺の開基、文祿元年辰(一五九二)五月二十八日示寂とある」(飯塚政美)

跡

昭和六十二年十二月、昭和六十三年一月 図面の整理、原稿執筆報告書の編集をする。

昭和六十三年二月 報告書を印刷所へ送る。

昭和六十三年三月 報告書を刊行する。

二 遺構

今回の調査では遺構の検出は何もなかった。その理由としては南方及び東方の山麓の押し出しが強く、定住生活に適當ではなかったと思われる。層位の堆積の仕方については第二図地層断面図を掲載してあるので、それを参考にしてください。

三 遺物(図版6)

今回の調査で出土した陶器片は数片であった。全て江戸時代に位置づけられる。①は瀬戸天目茶碗の破片であり、③は①と同一個体である。高台が高く付けられている。②、④は瀬戸鉄軸摺鉢の口縁破片である。⑤、⑥は同一個体で、瀬戸天目茶碗である。高台は低目で、本と言う字が陰刻されている。

(飯塚政美)



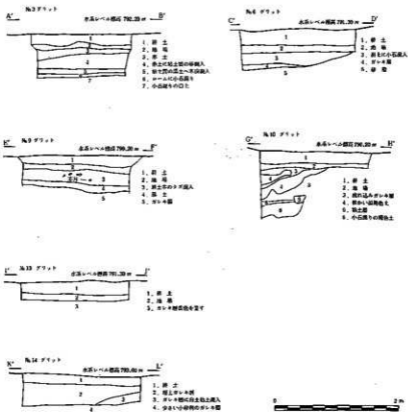
第1図 グリッド配置図 (1 : 1,000)

四 まとめ

奈良尾遺跡は前述したように現況は水田であり、しかも減反田となっていた。実際に耕土を取り除いてみると、地層層面では湿地となっており、松の枝による暗渠排水がつくられていた。要するに、地形・地質的にみて、集落の存在した可能性は全くなかったと決めてよいように思われた。

出土した近世陶器は川に捨てた破片が大木の時に流れ込んだように想定できる。その理由としては、出土層は總体的にみて、砂層が主であった。

(飯塚政美)



第2図 地層断面図



図版 1 遺跡地を北側より眺む



図版 2 遺跡地を東側より眺む



图版3 地层断面



图版4 发掘风景



発掘風景



陶器出土状況



陶器出土状況



陶器出土状況



陶器出土状況



陶器出土状況

図版5 発掘風景及び出土陶器



①



②



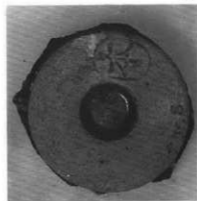
③



④



⑤



⑥

圖版6 出土陶器

宮の原遺跡

一 発掘日誌

昭和六十二年八月十九日(水) 晴 奈良尾遺跡から宮の原遺跡へ発掘器材を運搬する。テントは小松川に面した南側の高い所へ南北に長く、二張り建てる。午後、発掘調査予定地にブルトーザーを入れて耕土剥きを実施する。耕土剥き終了後、直ちにグリットを設定する。南から北へA-I、東から西へ1-4十とし、一辺2.0m×2.0mの面積40㎡とする。

昭和六十二年八月二十日(木) 晴 A-Iより掘り始める。耕土を剥くと、下から地場層が発見され、地場層を取り除くと、少量の縄文中期土器片、縄文後期土器片、石器が出土した。

昭和六十二年八月二十一日(金) 晴 グリット掘りを北側、北側へと掘り進めていく。北側に寄った二枚目の水田の南東付近に方形の落ち込みがみられ、これを第一号住居址とし、プラン確認を行ない、掘り始める。

昭和六十二年八月二十四日(月) 曇時々晴 第一号住居址の発掘を終了する。カマドは西側の中央部付近にあり、カマドに使用した石は破壊されてしまっていて、わずかに焼土だけ残存していた。灰釉陶器片の出土をみた。

昭和六十二年八月二十五日(火) 曇時々晴 第一号住居址の北

側のグリット掘りを進めていくと、円形状の落ち込みがみられ、これを第二号住居址と決め、プラン確認を進める。

昭和六十二年八月二十七日(木) 晴 第二号住居址の掘り下げをする。

昭和六十二年八月二十八日(金) 晴 第二号住居址の掘り下げをする。

昭和六十二年八月二十九日(土) 晴 第二号住居址の掘り下げをし、ほぼ発掘を終える。

昭和六十二年八月三十一日(月) 曇時々晴 第一号住居址、第二号住居址の写真撮影を終了。同じく、前述した住居址の実測終了。全測図の作成

昭和六十二年九月一日(火) 晴 発掘器材のあとかたづけ、発掘を実施する。

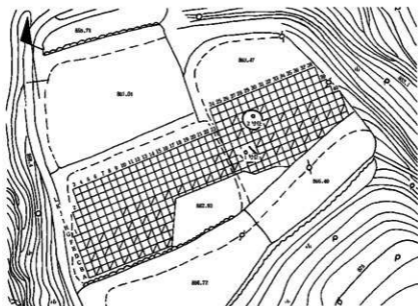
昭和六十二年十二月1日昭和六十三年一月 園面の整理、原稿執筆報告書の編纂

昭和六十三年二月 報告書を印刷所へ送る。

昭和六十三年三月 報告書を刊行する。(飯塚政美)

二 遺構

今回の調査で検出された遺構は縄文中期後葉整穴住居其一軒、平



第1図 遺構及びグリット配置図 (1:1,000)

安時代竪穴住居一軒であった。調査を実施した時点では縄文中期土器片、縄文後期土器片が相当量出土した。この事実がわかっては、相当数の遺構の存在が想定されるが、その後、数度にわたる土地造成の為に大部分は破壊されてしまった結果であろう。

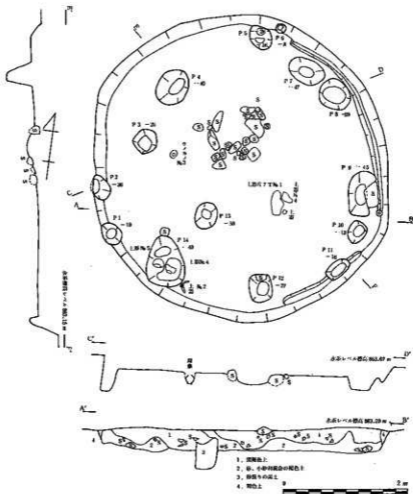
(1) 第二号住居址(第2図、図版5)

この遺構は今回発掘調査を実施した内では中央部よりやや北西に寄った一角に検出されている。

現況は水田であり、この水田耕作表土面より四十cm位下った砂礫混合の黄褐色土層面を掘り込んだ竪穴住居址で、その直径は四m七十五cm位の円形状を呈する。基盤が東から西へ傾斜しているため、壁は東側が高く、西は基盤傾斜に比例して低くなっている。東壁高は四十cm位、西壁高は二十cm位を測定できる。壁面はやや外傾気味を呈し、細礫が露出していた。

床面は砂礫混合の黄褐色土層中に構築され、大抵水平で堅くなっていたが、ところどころに細礫が露出していた。東壁面直下に幅十cm位、深さ五cm位の周溝が部分的に残存していた。炉は中央部よりやや北側に位置した所にあり、南北九十cm位、東西九十cm位の規模を有する。その形態は大きな石と、細礫を組み合わせた方形状に近い石圍炉である。石をとるところで二重に組み込んであり、丁寧な作りを成している。炉石は大部分花崗岩を利用してあり、洗けて赤く変色していた。

柱穴は四本主柱穴と思われ、それはP14、P9、P7、P4、であり、これらの周囲には補助穴がセットで検出された。



第2図 第2号住居址実測図

炉の西側に底部穿孔の埋塞が逆位の状態で検出された。この埋塞は一般的に検出されるそれと比較して割合に小さ目であった。埋塞の層年からみて、曾利Ⅱ式頃に本址は位置づけられよう。

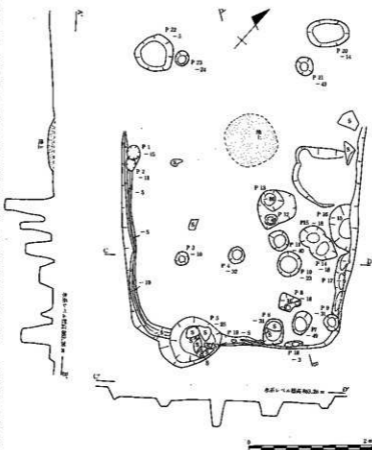
(2) 第一号住居址(第3図)

本址は第二号住居址の南側に検出され、南北四 m 二十五 cm 位、東西三 m 六十五 cm 位の規模を有し、隅丸方形形状を呈する竪穴住居址である。遺構の掘り込み面は表土層面から五十 cm 位下った砂礫混合黄褐色土層である。

基盤が東から西へ傾斜しているために、東壁は三十 cm 位認められたのに対し、西壁は全くなかった壁面は全般的に外傾し、全面にわたって細礫が露出していた。

床面は黄褐色砂礫層中につくられ、ややかたく、凹凸は多くなっていた。西壁中央部付近に多量の焼土が検出され、これはカマドの

残がいかと推測できる。また、東壁南半分から南壁面直下に小さな周溝が回っていた。



第3図 第1号住居址実測図

を保持しながら、緩い沈線が垂下している。黒褐色を呈し、焼成は普通で、少量の長石を含む。曽利Ⅱ式と思われる。

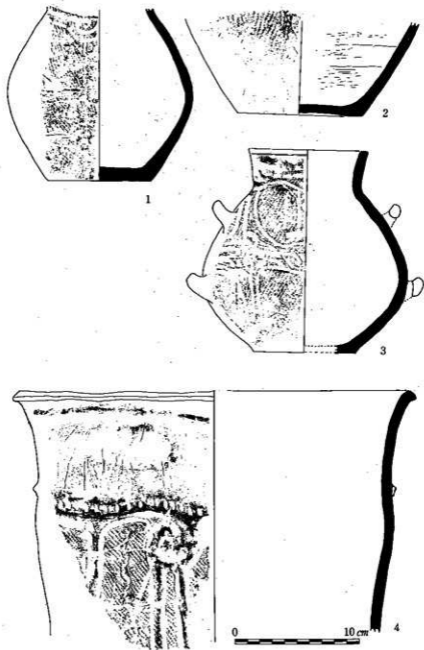
柱穴は北壁の方に集中的に発見されたので、配置状態は十分に考える必要があらうと思われる。

わずかに灰釉陶器片が出土しており、よって本址は十世紀後半から十一世紀初頭頃の住居址と想定できよう。

三 遺物 (第417図、図版8)

(1) 土器 (第416図、図版8)
今回、出土した土器は縄文中期土器が主であり、それに混じって、縄文後期土器、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器が少量出土した。

第4図(113)は第2号住居址より出土。出土遺物内訳番号は(1)はNo.2である(2)はNo.5、(3)はNo.3である。(1)は口縁部が欠損しているが小型の壺型土器である。口頸部文様は幅広ろの沈線を二本やや波状に横走させ、ところどころで渦巻状を呈する。二本の沈線の縁に沿って連続爪形文を押し捺してある。胴部から底部にかけては細かな斜縄文地へ、ある程度の間隔

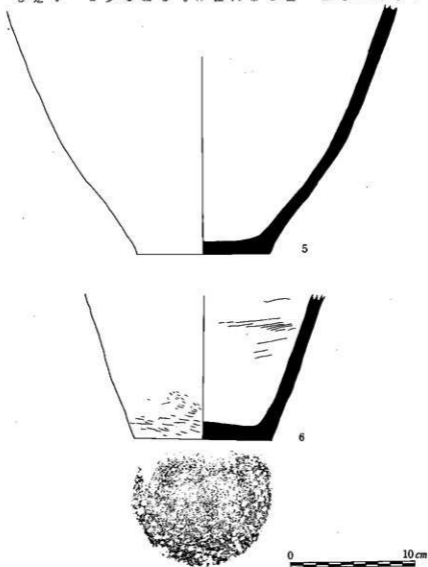


第4圖 土器 実測圖

(2) は割部より上は欠損してしまつた底部破片である。器厚は7mm位と中厚手に属しこの時期としてはめずらしい。

破片上部の外面に、斜縄文が施され、下部は無文帯となつている。内面には擦痕が横位に走り、その製作状況が察せられる。明黄褐色を呈し焼成は中位で、胎土に含まれている鉱物類は極めて少量である。曾利Ⅱ式頃と思われる。

(3) は第二号住居址の床面に逆位の状態で出土し



第5図 土器実測図

た埋裏であり、底部の中心部が欠損している。この欠損箇所は現在の被損状態からみて、埋裏埋設時に人為的に被損したのか、後世の自然的条件による被損かは現段階では判断がつかない実状である。

口縁径九・五cm、底径八・二cm、最大胴径十六・二cm、高さ十六・一cmを測る造型土器である。口唇部は平坦で、口唇から口頸部にかけて、わずかに外反し、口頸下部から胴下部にかけてはやや球形状を呈している。外面にはそれぞれ2個づつ対になった小突起が4個貼り付けられており、これらの中心部は円形状に空洞になっていておそらく、紐を通して釣るすように使用したのではないだろうか。

次に、文様構成からみてみよう。口縁部から口頸部にかけては無文地帯を成している。胴上部文様帯は斜縄文地へ、ヘラによる幅広い沈線を二条蛇行状に配してあり、その蛇行状態はある程度の規則性を有していた。胴中部文様帯は斜縄文地へ、ヘラによる幅広い沈線を三条縦状と横状に組み合わせ、全体としてU字型状を呈している。U字型状の下部コーナーにはワラビ手状の渦巻文がみられる。胴下部文様帯は斜縄文地へ、ヘラによる幅広い沈線を三本、逆U字形状に、そのコーナー端末はワラビ手状渦巻文様を構成している。明赤褐色を呈し、焼成は良好、胎土中に少量の長石、雲母を含んでいる。器内の土中に多量の炭化物と焼土を認められた。曾利Ⅰ式に含まれると思われる。

(4) はグリット内より出土した朝顔型状を呈する深鉢型土器である。口縁径三一・八cmを測り、胴下部以下は欠損している。口縁部は、やや外反し、口唇部は外そぎであり、胴中央部付近で、やや

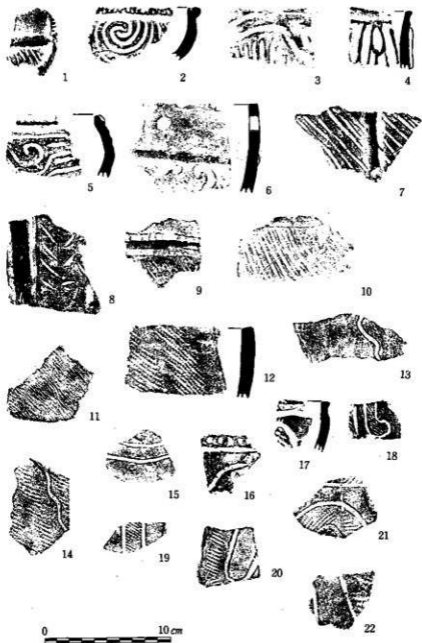
ふくらみ状態と成る。口縁部文様帯は無文を成し、胴上部文様帯は隆帯を弧状に配し、その縁に沿って点列文を刺突してある。胴中部文様帯は斜縄文地へ高い懸垂文風隆帯を貼り付けてある。黒褐色を呈し、焼成は良好で、少量の雲母、長石を含んでいる。曾利Ⅰ式に含まれていると思われる。

第五図(516)はグリット内より出土した底部破片である。(516)ともに外・内面ともに無文で、わずかに擦痕を有する。

(5)の内面にはスズが多量に付着していた。(516)ともに赤褐色を呈し、焼成は良好であった。曾利期に含まれると思われる。

第6図(1122)は遺構の覆土上層面より出土した土器片であり飛び込みの可能性が極めて濃いと思われる。(1122)は隆帯の発達が顕著なもの、(1)は柳形文様風、(2)は幅広い沈線が渦巻文様にそれぞれ配されている。(1122)ともに赤褐色を呈し、焼成は良好である。(1)は井戸尻皿式、(2)は加曾利EⅠ式の含まれると思われる。(3)は幅広い沈線の組み合わせによって文様構成がなされている。黒褐色を呈し、焼成は良好で、少量の雲母を含む。加曾利EⅠ式の古い方に属していると思われる。(4)は無文地へ細い粘土粒を貼り付けてある。赤褐色を呈し、焼成は中位、少量の長石を含む。加曾利EⅠ式の古い方に位置していると考えられる。(5)の文様構成の仕方は(3)と類似している。赤黒褐色を呈し、焼成は良好で、多量の雲母を含む。時期は(3)と同様であると思われる。

(6)は無文、横位隆帯、斜縄文地の三文様構成があった。口縁



第6圖 土器拓影

直下に補修孔が穿けられていた。明黄褐色を呈し、焼成は中位、少量の雲母を含む。加曾利EⅠ式と思われる。(7)は綾杉文様風が見られるもの。(8)は人の字状文様がみられる。(7)は黒褐色、赤褐色(8)を呈し、焼成は両方とも普通、また2片とも少量の雲母を含む。(7-8)は加曾利EⅡ式に含まれると思われる。

(9)の破片上部は無文、中部は横位隆帯とその縁に刺突文、下部は斜縄文を配する。黒褐色を呈し、焼成は普通、胎土中に多量の雲母を含む。加曾利EⅡ式の新しい方に属していると思われる。

(10)は無文地へへらによる幅広ろの波線がやや斜状や弧状に施されている。明黄褐色を呈し、焼成は良好、少量の雲母を含む、灰煙型に類似している。(11)は燃糸文が顕著なもの、黒褐色を呈し、焼成は中位、少量の雲母を含む。

(12-14)は斜縄文が文様の主体を成しており、これらの下地のもとに、(14)蛇行状沈線風懸垂文が走向している。(13)は無文地に蛇行状懸垂文の意匠が採用されている。(12-14)は茶褐色、(13)は黒褐色を呈する。(11-14)は加曾利EⅡ式頃に含まれると思われる。

(15-22)は縄文後期土器片である。無文地の上に沈線が区画風に配されているもの(15-16)、縄文地に沈線によって区画された所謂、磨消縄文の工夫がなされているもの(17-22)に大別できる区画沈線に弧状(17-18、20-21)、直線状(19-22)というように細分される。色調は赤褐色(15-17、19)、黒褐色(16-18)、明黒褐色(20)、明黄褐色(21-22)を呈する。

(2) 石器 (第719図)

出土石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、横刃型石器、凹石、石鏃、石鏃等々であり、その概要について以下に述べていく。第7図は第2号住居址出土品である。第(819)図のは第一号住居址及びグリット内の出土。

打製石斧 (第7図 1-4)

6点出土したうち、4点を図示した。4点とも完型品であり、できばえは良好。(1、3)は短冊形に、(2)は楔形に、(4)は片刃楔形に分類できる。全て緑泥岩を利用。

磨製石斧 (第7図 5-9)

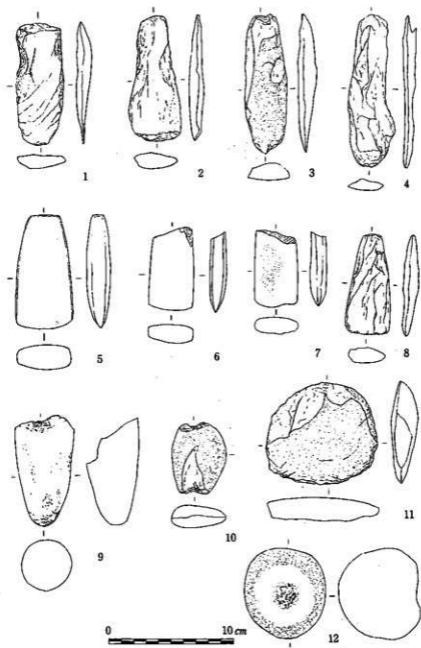
5点出土した全てを図示した。(5、8)は完型品であるのに対し、(6-7、9)上端部が一部欠損している。形態的にみて、定角式(5-8)、乳棒状式(9)の二つに大別される。定角式を仕上げ工程的に分類してみると、(5-6)は刃部及び全面磨いてあるのに比較して(7-8)は刃部周辺を磨いてあるだけで、その他には自然面を残す。(5)は蛇紋岩、(6-8)は緑泥岩、(9)は安山岩製の岩石を用いている。(9)の磨製の箇所は全体の一部にも満たない。

石鏃 (第7図 10)

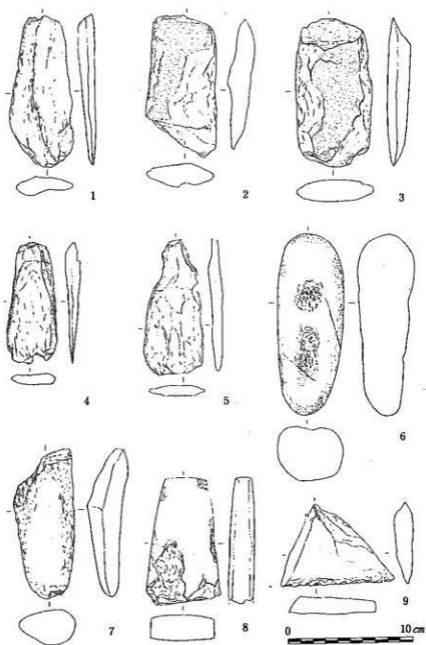
硬砂岩製の細鏃の上・下端の一部を打ち欠いて凹みをつけてあり石鏃としては小型で、よくととのっている。

横刃型石器 (第7図 11)

円盤状の砂岩を打ち欠いて扁平状に仕上げ、下端に刃をつけて、



第7圖 石器 実測圖



第8図 石器実測図

横刃型石器の形態を整えている。縄文中期によく出土する典型的な横刃型石器である。

凹石 (第7図 12)

一掘り程度の花崗岩を用いて凹形上に仕上げている。凹みは三面にそれぞれ一つづつ穿けてあり、その深度は浅く、凹みの輪郭は割合に漠然としている。一面は孔の周辺がフラットになる程磨き上げている。この点は典型的な凹石からみてやや異質と思われる、その用途をもう一度、考え直してみる必要がある。

第8図(119)に掲載してある石器は一般的にみて、打製石斧、磨製石斧、凹石、横刃型石器に大別できる。

打製石斧 (第8図 115)

余体的に十点近く出土したが、図示しても適当と思われる5点ここに掲載した。5点とも下端部に若干の開きをみるが、短冊形の仲間を含めてもよからう。完型品は(1)だけで、他の4点はどこか部分的に欠損している。石質は緑泥岩(1、415)、砂岩(213)である。

磨製石斧 (第8図 718)

今回の発掘で出土した磨製石斧はここに図示した2点のみである。(7)は乳棒状、(8)は定角式をなし、ともに、どこか欠損をしている。ともに緑泥岩を用いる。(8)は第一号住居址出土。

凹石 (第8図 6)

一点だけの出土。長円形の凹石で、片面に三孔を穿けてある。三孔のうち二孔はくつつき、一孔は離れている。孔の周囲は孔自体が

深く穿けられているので、凹みが歴然としており、凹石としては良品であろう。さらに、調整として孔の周辺を丁寧に磨き上げてある硬砂岩を利用。

横刃型石器 (第8図 9)

砂岩を用いて作ってあり、余体的に三角形状を呈し、左側半分は欠損している。大部分は自然面を残り、下端部に見事な刃を作り出してあり、この刃部は一見すると鋸歯状に見える。

第9図は黒曜石製の石鏃と撻器を掲載した。

石鏃 (第9図 1)

形態についてみると、凹基有蓋に属し、やや偏平である。調整加工の抉り込みは深い。全面に丁寧な剝離痕を認め、石鏃としては優品に含まれるのであろう。片脚全部、片脚の一部を欠損する。

撻器 (第9図 213)

撻器は2点出土したのみであるが、ともに刃部の剝離調整は見事である。(飯塚政美)



第9図 石器実測図

四 まとめ

富県の上新山地跡、山麓扇状地に広がっている宮の原遺跡の発掘調査を行った。実際に発掘調査に着手してみると、後背地の押し出しによる堆積土が厚く覆っており、さらに、何回にもわたる開田の為に土層の破壊は顕著であった。従って、調査開始時点では、遺構検出土層面把握に手間どってしまった。丁寧に地層確認をしながら調査を進めた結果、縄文中期後葉の竪穴住居址一軒、平安時代中頃の竪穴住居址一軒の確認をみた。

第二号住居址は直径四m七十cmあまりの円形プランで、竪穴住居址の形態を有し、極一般的な住居址であった。炉は方形の石囲炉で、ところどころで二重に組み合わされていた。炉石は近くに産する花崗岩が主体となっていた。

炉の西側に底部穿孔の埋塞が逆位の状態出土した。この埋塞は割合に小さ目であった。

第一号住居址は南北四m二十五cm位、東西三m六十五cm位の隅丸方形状を呈する竪穴住居址であった。カマドは何回にも及び土地造成のために大部分破壊されてしまっていた。

次に出土した土器を編年に基づいて述べてみると次のようになる。曾利Ⅰ式、曾利Ⅱ式、井戸尻Ⅲ式、加曾利Ⅲ式となる。

石器は形態及び機能別に分類すると、打製石斧、磨製石斧、石鎌、横刃型石器、凹石、石鏃、搔器である。

かなり標高の高い所にも縄文中期集落址の存在、さらに、灰釉陶器の出土によって平安時代中期頃に文化浸透が新山谷の奥まで及ん

でいたことを今回の調査で実証してくれた。当然ながら、陶器は東山道沿いに運搬されてきたのであろう。

宮の原遺跡の発掘調査及び報告書作成に当たっては、長野県教育委員会文化課、上伊那地方事務所土地改良課職員一同、調査団の各先生方、作業員各位に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

(飯塚政美)



図版1 遺跡地を南側より眺む



図版2 遺跡地を西側より眺む



図版3 遺跡地近景 (グリット配置)



図版4 発掘風景



图版5 第2号住居址



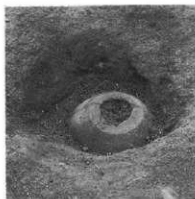
图版6 第1号住居址



第2号住居址炉



土器出土状況



第2号住居址埋壙上部



第2号住居址埋壙断面



土器出土状況



土器出土状況

図版7 遺構及び遺物出土状況



出土土器



出土土器



出土土器



出土土器



出土土器



出土土器

图版8 出土遗物

